

◆重点普及課題

沖縄ミーバイの養殖および販売促進活動支援

水産海洋技術センター 牧野清人

1. 目的

沖縄ミーバイ（ヤイトハタ）の生産量は、平成21年度～26年度までは70t～90tで推移していたが、27年度には約56tと落ち込んだ。一方、平均キロ単価はこの数年間でおよそ1,300円～1,400円前後とほぼ安定している。県内の仲買業者によれば、観光ホテル等を中心とした県内外での需要が増えているのに対し、供給量が追いつかない状況がみられる。県では当面100t以上の生産を目標として集約的な陸上養殖技術開発ならびに海面養殖における生残率向上の他、県産魚粉を使用した安価な飼料開発に取り組むなど、将来的な生産量の拡大が期待されている。水産業改良普及業務においては、養殖ハタの生産量安定化につながる飼育管理指導や魚病発生時の迅速な対応等を行っている。また、養殖コスト削減を目指し、県産魚粉を主原料とした飼料開発と養殖試験を実施している石垣支所と連携し、県内飼料会社等との情報交換を行っている。さらに、将来の沖縄ミーバイ生産量の拡大に対応するため、県内外での流通確保が必要となることから、平成24年度に発足した生産者、取扱業者等を中心とする「沖縄県ミーバイ生産者販売促進協議会」と連携した販売促進活動を支援している。28年度は県産魚粉を主原料とした飼料に関する情報交換などの他、役員会や販促活動、品質に関する勉強会等、協議会活動への支援を中心に取り組んだ。

2. 取り組みの内容

①. 県産魚粉飼料に関する情報交換

沖縄県飼料協業組合において、県産魚粉を主原料としたDP（ドライペレット）とMP（モイストペレット）を用いたヤイトハタの養殖試験

について、石垣支所山内研究員より報告があった。支所では飼料コスト削減に向けた適正給餌技術の開発試験を行っており、県産魚粉DPの方が市販のマダイEPに比べ摂餌活性が高く、冬場の成長が良い結果がみられ、食味比較でも遜色が無いことが分かった。また、県産魚粉MP給餌においては60日間の飼育で、餌付きや成長・生残といった飼料としての適正に問題がなく、十分利用可能であることが確認され、安価な原料を使った新たな飼料開発が期待できる内容であった。今後、MP給餌による飼料効率や成長特性に関する基礎データを蓄積し、EPや生餌を給餌との違いについて整理するとのことであった。



図1. 県産魚分飼料に関する情報交換会



図2. 県産魚粉飼料とマダイ配合飼料給餌によるヤイトハタの食味比較

②沖縄県ミーバイ生産者販売促進協議会支援

(1) 役員会

4月22日、水産会館において第1回役員会が開催された。今年度活動、協議会役員改正、協議会会員名簿、会費等について話し合われた。協議会HPのリニューアルにあたり管理委託業者から、新着情報等の更新や会員間での情報共有方法について説明された。また、総合事務局と法律特許事務所より、地域商標取得について情報提供いただいた。さらに栽培漁業センターよりヤイトハタ種苗生産状況について、水産海洋技術センター中田主任研究員より水産用医薬品効能追加事業について説明があった(図3)。

8月5日、水産会館にて、第2回役員会が開催された。公式HPの沖縄ミーバイ取扱店について、在庫状況等の情報共有について、協議会生産者および取扱業者での勉強会、青壮年女性漁業者交流大会での取組み発表等が決議された。また、水産課から、「持続的な漁業生産額拡大のためのマーケティング支援事業」により、PRのための戦略的プロモーションについての説明があった。さらに、栽培漁業センターより、今期のヤイトハタ種苗生産状況について情報提供がなされた(図4)。

(2) 総会

29年1月31日に、協議会通常総会が水産会館において開催された。総会には会員の他、県担当職員含め17名が出席した。議事(平成28年活動・収支報告、29年活動計画・予算案、役員改正)については全員一致で承認された。総会終了後、ヤイトハタ種苗生産予定および、28年度に配付したチャイロマルハタの生育状況情に関して意見交換がなされた。また、情報提供として、(株)ぐるなびより沖縄ミーバイ勉強会報告、えるだ法律特許事務所より地域団体商標登録について、水産海洋技術センターから公式HP更新ならびにヤイトハタ急速冷凍について説明された(図5)。

(3) イベント活動

1) 沖縄市ファーマーズマーケット周年祭

11月27日、JA沖縄市ファーマーズマーケット9

周年祭会場において、ミーバイ協議会による販促活動が行われた。料理作りと販売は協議会員である伊平屋村漁協と与那城町漁協が対応した。会場ではミーバイ汁およびミーバイジュシーを販売し、完売した。また、子供を対象とし、ヤイトハタとマダイのつかみ取りが行われた(図6,7)。

2) 花と食のフェスティバル

2月4日、5日に開催された沖縄花と食のフェスティバル会場伊平屋村漁協ブースにて、沖縄ミーバイ汁の他、加工品のミーバイチップスを販売し、チラシ等の販促グッズを用いてPR活動を行った。

(4) 取扱店舗紹介

公式HP内の取扱店コーナーについて、管理業者により、編集可能なシステムに更新した。これに伴い、過去に紹介された取扱店舗について一旦抹消し、現在取扱いのある店舗を調査し、沖縄ミーバイを取り扱う飲食店8店舗および販売店1店舗を新規紹介している(図8)。

(5) 沖縄ミーバイ勉強会

11月9日、名護市の料亭「神着」にて、沖縄県水産課主催で「持続的な漁業生産額拡大のためのマーケティング支援事業」により沖縄ミーバイ勉強会が開催された。勉強会には協議会会員の他、飲食店関係者が多数出席し、参加者は45名であった。伊平屋村漁協ならびに八重山漁協が生産状況について紹介し、各産地(伊平屋、石垣、与那城、伊江、座間味)ごとに刺身の食味と品質評価がなされた。その結果、産地による違いはほぼ認められなかったものの、飼育期間により臭いや硬さの評価が異なる傾向が見られた。また、今年度より県から種苗配布されているチャイロマルハタについても試食していただいたところ、ヤイトハタと比べ、見た目や味に大きな違いはみられなかったが、食べた箇所によっては臭みが強いように感じられた(図9, 10, 11)。

3. 結果および考察

平成24年度に「沖縄県ミーバイ生産者販売促進協議会」が発足し、「沖縄ミーバイ」の商品名で販売促進活動を継続している。この間、公式HP開設による情報発信、生産者、取扱業者、飲食店等への実態調査、販促グッズ製作、イベント参加による販促活動ならびに複数回にわたる事業検討会等によって協議会機能が強化されてきた。これにより生産者および仲買業者を中心に安定供給や販売促進の取り組みが積極的に行われた。その結果、県内外で沖縄ミーバイの認知度が高まり、特に県内の観光ホテル等での取扱いが増加し、平均取扱い単価が1,300～1,400円/kgと安定化している。しかし、生産量の伸び悩みや養殖にかかるコストの軽減は未だ課題として残されており、これを解決するため、引き続き取り組んでゆく必要がある。生産量の増加については、養殖現場における生残率向上の他、新規参入者の確保、陸上養殖技術の確立が、養殖コスト軽減については、安価な飼料の開発ならびに流通がカギとなる。陸上養殖については近年民間業者が独自で整備した養殖システムや漁協組合員がウミブドウ養殖水槽等の簡易的な施設を利用したハタ類の養殖を開始している。これに対し、栽培漁業センターにより試験研究されている高密度陸上養殖試験等を参考とし、技術指導の他、経営方針も含め指導することで、新規参入者の確保につながると思われる。飼料コストの削減については、現在石垣支所が中心となって行っている県産魚粉を原材料とした新たな飼料の開発試験が取り組まれている。将来的にはこうした新たな飼料について生産技術の普及と流通する環境を整えてゆく必要があり、これには協議会を中心とし、県や県漁連、漁協、飼料会社等との連携が必要となる。



図3. 第1回役員会



図4. 第2回役員会



図5. 平成28年度通常総会



図6. ミーバイ汁販売（ちゃんぷる一市場周年祭）



図7. ミーバイつかみ取り（ちゃんぷる一市場周年祭）



図8. 沖縄ミーバイ公式HP取扱い店舗紹介



図9. 沖縄ミーバイ勉強会において調理頂いた中村カヌチャベイホテルアンドヴィラズ総支配人兼料理長



図10. 沖縄ミーバイ養殖について説明する協議会員（左：八重山漁協與那嶺課長、右：伊平屋村漁協須永氏）



図11. 産地別沖縄ミーバイ食味比較の様子